

平成 26 年第 1 回  
トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境監視委員会  
<会議録>

1 日時

平成 26 年 3 月 26 日（水） 午後 1 時 30 分～午後 3 時 20 分

2 場所

愛知県産業労働センター ウィンクあいち 10 階 1002 会議室

3 報告

- (1) 平成 25 年第 2 回委員会における指摘事項及びその対応
- (2) 各種計画書に基づく取組状況（平成 25 年次）

4 議事

- (1) 環境保全措置（自然系）に関する実施計画書  
【実施地区 1（井口）】
- (2) 環境調査報告書（平成 25 年次版）
- (3) 事後調査報告書（平成 25 年次版）

5 配布資料

- ・ 平成 25 年第 2 回環境監視委員会（平成 25 年 10 月 8 日）における指摘事項及びその対応  
【資料 1】
- ・ 各種計画書に基づく取組状況（平成 25 年次） 【資料 2】
- ・ トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境保全措置（自然系）に関する実施計画書（案）  
【実施地区 1（井口）】 【資料 3】 一部非公開
- ・ トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境調査報告書（平成 25 年次版）（案） 【資料 4】  
一部非公開
- ・ 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業環境影響評価に係る事後調査報告書（平成 25 年次版）（案） 【資料 5】

6 出席者

(1) 委員（五十音順）

大畑 孝二	委員	(公益財団法人日本野鳥の会チーフレンジャー)
北田 敏廣	委員	(岐阜工業高等専門学校校長)
洲崎 燈子	委員	(豊田市矢作川研究所主任研究員)
鷺見 哲也	委員	(大同大学准教授)
芹沢 俊介	副委員長	(愛知教育大学名誉教授)
高橋 伸夫	委員	(愛知県野鳥保護連絡協議会議長)
谷口 義則	委員	(名城大学准教授)
成瀬 治興	委員長	(愛知工業大学名誉教授)
柳澤 紀夫	委員	(公益財団法人日本鳥類保護連盟理事)

(2) 事務局  
愛知県企業庁、トヨタ自動車株式会社 等

(3) 傍聴人等  
傍聴人 2 名  
報道関係者 2 名

## 7 会議の概要

(1) 開会

(2) 報告

ア 平成 25 年第 2 回委員会における指摘事項及びその対応  
・資料 1 について、事務局から報告した。

イ 各種計画書に基づく取組状況（平成 25 年次）

- ・資料 2 について、事務局から説明した。
- ・各種計画書に基づく取組状況（平成 25 年次）について、委員の承認を受け、今後も引き続き現在の各種計画書に基づく取組を継続することとなった。

(3) 議事

ア 環境保全措置（自然系）に関する実施計画書

- ・資料 3 について、事務局から説明した。

<質疑応答>

(鷺見委員) 底生生物の生息環境を考慮した水路環境の保護は、長期的に安定的な環境であるのかどうか重要である。しかし、この場所は、長期的に土砂生産があり、ややフラットな面に水が流れてできている環境である。土砂生産が無ければ無いなりの保護があり、また、一旦大雨が降って、土砂生産がどんと起こって、その後、遷移していく場合では、保護よりはその遷移を見守らなければいけないこともある。保護のあり方については、モニタリングしながら議論すべきである。

(事務局) 実施計画書において、環境保全措置対象種の定量的なモニタリング調査を実施することとしており、推移を見ることができる。

(鷺見委員) 保護のあり方が変わるであろうということを指摘した。具体的に書きにくいですが、現況に対する保護ということで、モニタリングするので良い。

(成瀬委員長) 本実施計画書を承認してもよろしいか。

(各委員) 承認する。

イ 環境調査報告書（平成 25 年次版）

ウ 事後調査報告書（平成 25 年次版）

- ・資料 4 及び資料 5 について、事務局から説明した。

<質疑応答>

(北田委員)

大気質の調査結果は、それぞれ十分に濃度が低い値で良かった。

しかし、これは、四季別の1週間、1年間のある特定の期間について測定した結果である。もちろん、調査は、調査計画に基づく方法で良いが、大気質は、時期によって大気質の濃度を变化させるバックグラウンドの気象は異なる。ほかに観測地点がなければ、これだけが全ての情報となるが、近くの下山支所で連続測定しているデータがあるので、これを活用すると良い。それぞれの物質について、観測した期間の28個の日平均値と下山支所の濃度との関係を分析してみて、相関があった場合、一番高い日平均値も評価できるし、下山支所の連続測定から一番高そうな時期も推定できる。せっかくデータがある訳だから、考察の一文をつけ加えるとより一層良い。

(事務局)

下山支所における連続測定 of データを使った推定をして、影響を見てはどうかとのご助言である。事務局で一度検討させて頂きたい。その際にはご指導・ご助言頂きたい。

(鷺見委員)

水質も同じ問題がある。

評価基準は過去に計測した濁度の最高値としており、変えられない。当然、濁度は出水の規模によって大きく変わるため、過去の規模よりも大きい出水があれば、評価基準を超えることは想定される。このため、全ての地点ではないが、降雨と濁度あるいは負荷との相関をとり、工事中のデータが元々の関係の範囲内にあるかどうか考察した参考資料を作成している。今回は評価基準を超えていないということを出していないが、そうした参考資料の取扱をどのようにするかが共通する問題である。特に濁度の場合は、出水との関係からどれくらい外れたかという情報は載せたいが、既に評価基準と評価方法は決まっているため、報告書には決められた評価手法の範囲のみ記載するというルールならば載らないという話である。今回私はこれで良いと了解している。参考情報の取扱いとして、水質も同じく検討頂きたい。

(事務局)

MG-4 地点などの一部データについて、鷺見委員からご指導・ご助言頂きながら、参考的に流砂量と流量の関係を確認・検討したが、評価基準を超えていないため、今回は参考情報の掲載は見送ったという経緯がある。

水質についても、事務局で参考情報の取扱いや載せ方は検討させて頂きたい。その際にはご指導・ご助言頂きたい。

(谷口委員)

今回の濁度の最大値は123度で、評価指標の314度に適合していたと結論付けている。評価指標の314度が得られたときの降雨の時間最大降水量と総降水量は、幾つだったのか教えて頂きたい。

(事務局)

時間最大降水量は12mm、総降水量は54.5mmである。

(谷口委員)

同程度の降水量、つまり、時間最大降水量も総降水量も同程度の降雨のときに比較をしない限り、このような結論を導き出すことは難しいと考える。

(事務局)

工事着手前、5回の降雨時に調査を実施しており、この出水時の濁度データの最大値が314度である。この314度を評価指標として採用し、造成工事中は濁水を調整池等々で制御し、それを超えないような対策をとることと

している。過去の結果や降雨との比較のような検討はしていない。

(谷口委員) 環境アセスメント的な考えとしては良い。しかし、一般的に考えたときに、雨がたくさん降るとたくさんの土砂が出る訳であり、そこは考慮しないのか。

(鷺見委員) 評価基準については、出水レベルを評価するのかということ、アセスの中で確定できなかったことが原因であり、314度は仕方がない。結果的に、濃度基準だけの評価となり、出水規模に対応する濃度基準にはなっていないことに問題がある。一方、谷口委員の意見のように、降雨の規模に対応して濃度レベルも変わるので、その関係も見なければいけない。計画書に定めた評価方法ではないが、参考情報も評価指標の一つとして取扱い、合わせて評価することを検討頂きたいと申し上げたのが先程のやりとりである。

もう一言加えると、その対応関係は降水量と濃度の関係ではなく、流量と濃度の関係とするのが一般的な方法である。一番良いのは、流量を現場で測って頂き、流量と出水時の濃度との対応関係が、べき乗の関係や、何か対数をとったら線形になり、今回のデータがその上に乗っている、乗っていない、外れる、外れないことを考察できる資料が、実際に見たい参考情報である。

先程の降水量との対応関係で考えるよりも、発生する流量との対応関係、つまり、ある流量レベルのときの濃度での対応関係で比較する方がより望ましい。現在は、流量での対応ができないので、その部分も含めて情報をどう出せるのかを検討頂きたい。

(事務局) ご指導・ご助言を得ながら検討させて頂きたい。

(洲崎委員) 今年度は気象災害が多い年であり、秋の洪水や冬の大雪など、流域のあちこちで小規模な崩落、冬は樹木の幹折れや枝の落下による道路の寸断・停電といった災害があった。このテストコースがどうであったのか教えて頂きたい。

(事務局) 今年度の災害として、秋の降雨時に倒木等が何件かあったが、事業地内で大きな被害はなかった。冬の積雪時も、足助北部や稲武では40~50cmと多い積雪であったが、事業地では20cm程度であり、大きな被害はなかった。

(洲崎委員) 地球規模の温暖化などの環境変動で、災害が増えることが懸念されている。造成地や間伐直後の林内環境が改善していない場所は、一時的に災害が発生する恐れもあるが、事業地の間伐によって森づくりが進めば、植栽木が成長し、林内の植生が回復して災害にも強い環境になっていく。記録によって検証できるため、わかる範囲で記録を取っておくことが望ましい。

(事務局) 各種計画書に基づく取組で記録は取ることとしており、その中で確認に努めたい。

(高橋委員) 鳥の関係は、一生懸命やっているのも良い。

下山周辺の方がたの生活を考えた時、地元の人にとって一番の心配事は、工事が始まって周りの交通量が増えたことである。交通事故や排出ガスは増えた可能性があり、記録を取っておいた方が良い。

(事務局) 下山周辺の交通事故や排出ガスの記録は把握していない。しかし、各種計画書に基づく取組状況で報告したとおり、現地入りする業者にエコドライブ

の徹底等を指導して、排出ガスの排出量は削減していきたい。

(事務局) 各種計画書に基づく取組状況で報告したとおり、工事や調査関係の会社を含めた連絡調整会議を開催しており、事故があれば報告頂くことになっている。今のところ、報告がないため、加害事故はなかったと考えている。

(事務局) トヨタが実施する工事も、引き続き企業庁の業者指導と同様な体制で実施したい。また、供用後は、従業員に対する交通安全教育等を含めて、特に地元の方にご迷惑にならないように努めていく。

(大畑委員) ミゾゴイ、ハチクマ、サシバに関しては、妥当な評価である。

周辺の話として今日の資料にもあるが、様々な調査を行って、サシバの論文を公表したり、トノサマガエルのポスター発表をしたり、大変良いことである。今後も引き続き、調査結果について、論文等を含めて広く社会に発表して頂きたい。また、市民・一般向けのサシバやハチクマなどの冊子も大変良いことであり、環境学習センターでも活用できる。現段階において、今後の冊子の活用方法や、環境学習センターに関わることを教えて頂きたい。

(事務局) 論文等は、いくつかテーマを頂いており、調査したコンサルとの協力体制が整い次第、順次進めていく。

また、冊子は、希少種の情報を広く発信して、いろいろな方面の保全に活かして頂けることを目的に作成した。また、小学校高学年がわかる内容にして、環境学習の題材等にも使えるように取りまとめた経緯もあり、うまく使っていきたい。現在、これらの冊子以外に、カエルの冊子を取りまとめているので、でき次第報告する。

(事務局) 事業区域内で実施している各種環境保全措置の取組などの環境情報について、4月から四季で環境レポートを発行し、地元住民の方々への回覧や県のホームページなどを通じて、情報発信していく。

(大畑委員) ホトケドジョウ絡みの調査や環境保全措置で実施していることを教えて頂きたい。

(事務局) 実施計画書において、ホトケドジョウに対する環境保全措置として、水域ネットワークの整備を掲げており、ホトケドジョウの落差工を解消するため、昨年、ある実施地区で千鳥X型やコルゲート管を用いた魚道の整備を実施した。

現在、新たな水域ネットワークの整備を図るため、谷口委員及び鷺見委員のご指導・ご助言を得ながら、詳細計画を作成中である。

(成瀬委員長) 環境調査報告書及び事後調査報告書を承認してもよろしいか。

(各委員) 承認する。

#### (4) 閉会

以上